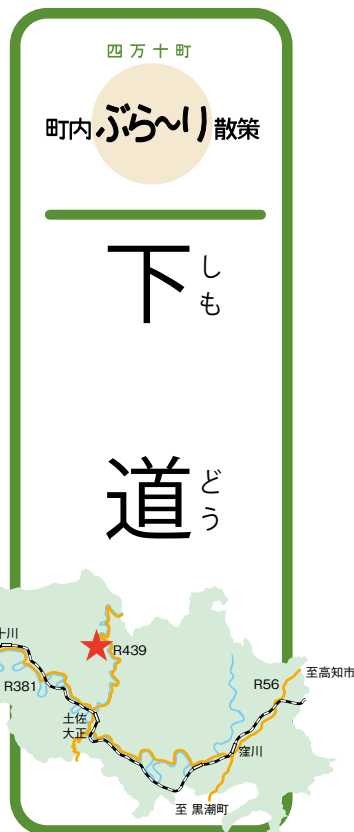




先月・先々月の木屋ヶ内から、橋原川に沿ってさらに北進すると津賀ダムが現れる。向こう岸に向かってダムの上を渡る。そこから下道である。ダム湖に沿った道をしばらく行くと集会所があり集落が始まる。この道はくねくねと山を登って行く。登り切ったところは空が開け、陽当たりの良い田畑が広がっている。ここに集落の産土神である春日神社がある。春日神社の隣には八坂神社が祀られている。この二つの神社の裏山の頂には稲荷神社があり、金比羅神社が合祭されている。稲荷神社と金比羅神社は、元は別の場所にあったらしい。地区の方のお話によれば「昔は安産の神様ということで稲荷神社にお参りに来る人がたくさんいた」という。また、下道には以前、二体の仏像を有した蔵正庵というお寺があったが、これは茶堂に移されている。

ところで、この小さな集落になぜこれほど多くの神社があるのか。しかも、春日神社は、あの奈良の春日大社の分祀であるし、八坂神社は京都の八坂神社の分祀である。現に、この八坂神社も京都と同様に「祇園さん」と呼ぶ。かつての都の二つの名高い大社から分祀を許されるというのは、相当な中央とのパイプの持ち主が、この地に存在していたということが想像できる。地区の方も「地元でもそういつたことが考えられている」と語る。

さて、下道は下津井の南隣である。古くから林業が主たる産業で、下津井から田野々へ向かう森林軌道が通っていた。まだ自動車が普及していない頃、村の当番にあたる者数人が、「皆の生活物資の調達」のために、この軌道を使って田野々まで出かけて行った。板トロ(一口)と呼ばれる台車を線路に載せ、3〜4人で押す。帰日も物資を積んで押して帰った。曲がりくねって見通しの悪い

軌道である。木材を積んだ機関車といつ遭遇するかわからない。機関車の方も事故を恐れて、絶え間なく汽笛を鳴らしながら走っていたそうである。機関車と遭遇しそうな時は、急いで荷物を降ろし、台車を線路から外して機関車が通り過ぎるのを待ったのだという。また、営林署の運動会の時の話などはさらにスリリングである。その日は炭を運ぶための台車(炭トロ)に大勢の人が乗って田野々との間を往復するのだが、問題はお酒が入ってしまったという帰りである。手すりはおろか、枠さえも無く、車輪の上に板を載せているだけの台車に酔客を乗せ、くねくねと曲がる線路を行く。かなりの遠心力がかかる。おまけに機関車の運転手も一杯入っているから、そこそこのスピードが出る。当時を知る地区の方が「あれでよく事故がなかったもんだよ」と笑う。

地区には津賀ダム建設の過酷な労働に従事した朝鮮半島の人々を悼む慰霊碑が建てられている。この慰霊碑制作にあたっては、ダム建設当時の彼らの苦難を知る地区の方たちの協力があったという。当時労働者の子息たちと机を並べ、共に遊んだ下道の人々の優しさと温かさを感じずにはいられない。



左が春日神社。右奥が八坂神社(祇園さん)

先月号の「木屋ヶ内②」の写真(場所)に誤りがありました。訂正してお詫びいたします。

町のうごき	(1月31日)	人口	前月比	出生	死亡	転入	転出	四万十川の水質状況	適正值(mg/l)		2月4日
	男	7,679	－4	男	5	12	14	11	リン酸	≤ 1.0	測定範囲以下
	女	8,400	－27	女	3	21	6	15	硝酸	≤ 0.5	0.362
	計	16,079	－31	計	8	33	20	26	アンモニウム	≤ 5.0	測定範囲以下
	世帯数	8,220	－16						アニオン活性剤	≤ 1.0	測定範囲以下
							(1月中の届出)		化学的酸素要求量	≤ 10.0	0.25
	窪川地域	11,409人		大正地域	2,238人		十和地域	2,432人	調査：大正(吾川)		
									資料：四万十高校自然環境部		